

たこともある。昭和二十六年当時のバススタート運賃十五円が二〇円に改定されたのは四十年のことで、じつに十四年間もすえおかれていた。こうしたことも、市営交通の大きな赤字累積の一因となっている。運賃を適正なものから遠ざけている物価上昇については、政府でさらに有効適切な措置を講ずる必要がある。

II 文化

市民ホール開館

昭和四十五年二月、市民待望の「横浜市民ホール」が、中区住吉町に開館した。このホールは洋画の封切館として市民に親しまれてきた元横浜宝塚劇場を改装したもので、安い料金で市民の催しや集まりに利用してもらうものである。伊勢佐木町や関内駅に近い都心部にあるため交通の便に恵まれ、場所的には申しぶんない。座席が一、三〇〇席あり、大人数の催しに適している。まだ日が浅いので連日ホールがふさがるほどの盛況ではないが、利用者は尻上がりにふえてきている。四十五年四月から八月までの五カ月間の利用状況をみると、

表 2—60 市民ホール使用状況

年度	44年度 (2月～3月)	45年度 (4月～8月)
使用件数	18件	56件
使用日数	21日	77日
入場人員	12,600名	39,200名

注：市民局調べ

入場人員は三万九、二〇〇名、使用日数は七七日で、そのおもな利用内容は、講習会九回、日本舞踊八回、ポピュラー音楽会七回、記念行事七回など、きわめて多彩である。開港記念会館や各区の公会堂では収容できない大型の催しの場として、今後市民の言論発表・教育・娯楽など各種活動の中心となるだろう。

このほか、市民の文化活動の場としては、スポーツのみならず、さまざまな大型の催しにも使われている収容人員六、二〇〇席の横浜文化体育館や、絵画・彫刻など造型美術発表の

場として親しまれている桜木町駅前の市民ギャラリーがある。市民ギャラリーは、「今日の作家展」「横浜市子供美術展」などを毎年開催しており、市民の間によりやく根をおろしたようである。旧中区役所を改装したこの建物は、もちろん、ギャラリーむきにつくられたものではないが、気どりがなく庶民的な近づきやすさがある。しかし、このギャラリーも一、二年のうちに移転する予定である。本牧と港北ニュータウンを結ぶ地下鉄三号線は、近く市民ギャラリー付近でも工事が始まり、移転しなければならなくなるので、四十七年を目標に吉田川と派大岡川が合流する万代橋のそばに教育文化センターを建て、その中の一部を市民ギャラリーとする予定である。吉田川は埋め立てて、地下鉄を通すが、その上をみどりの「大通り公園」とするので、公園に面した環境のよいギャラリーとなることだろう。

横浜駅東口の正面にはスカイ劇場がある。客席五〇〇の小さなまりした劇場であるが、ここでは毎月、市内のアマチュア劇団の公演がおこなわれている。横浜はアマチュア演劇のきわめて活発なところで、二〇年の歴史をもつ劇団が四つもあり、土曜劇場をはじめ毎月定期的に公演している劇団もある。

アマチュア演劇とともに有名なのが横浜交響楽団である。すでに二五〇回以上の公演実績があり、オペラの開催など意欲的なところをみせている。

これらの施設のほか、県立音楽堂・県青少年センターホール・県立博物館・県立図書館が横浜の都心部にあって、文化の中心的機能を受けもっている。

市大公開講座に都市問題

野毛山の市立図書館には二〇万冊をこえる蔵書があり、年間三〇万人以上の利用者がある。しかし、その利用者も主として学生であり、勤労者や主婦はなかなか利用できない。そこで、市立図書館では館外奉仕として団体貸出しをおこなっている。昭和四十四年度は、七四の町内会に、一六万冊、グループ貸出しでは一〇四グループに一二万冊をそれぞれ貸し出した。このほか、著名な作家・評論家を招いて母親読書教室や読書会を開催するなど、読書普及にとめている。四十五年度からは、移動図書館として図書専用バス二台を巡回させることにした。一台につき千冊を積み、約百カ所をまわる予定である。

このほか、市の教育委員会では成人学校・中央青年教室・市民教養講座・教養セミナー・婦人教養セミナー・市民研修室・婦人教養大学・家庭教育学級など、いろいろな形で社会教育の場を用意しているが、そのうちもっとも水準が高く、現代的なのが、市大の都市問題講座である。

横浜市立大学は、三十八年から大学のスタッフによる公開講座を開設し、市民に大学を開放してきた。公開講座は毎年六回、一八講座が開かれており、市民の聴講者が多い。また現在大きな問題となっている都市問題についても早くから注目し、四十年から学外の研究者・専門家の協力をえて、春秋二回都市問題講座を開講してきた。これまで、「首都圏計画と衛星都市の諸問題」「都市過密化と再開発」などをテーマに都市問題をいろいろな角度から取り扱ってきている。四十五年の秋は国際都市横浜にちなんで、「世界の都市と市民生活」をテーマとした。これらの講座は大学と地域市民を結びづなとなっている。

市立大学は、商学部・文理学部・医学部の三学部よりなる複合大学である。大学院はこれまで医学研究科のみであったが、四十五年四月より商学部に経済学研究科および経営学研究科

がスタートし、研究機関としても充実しつつある。またここ数年連続した校舎の整備もほぼ完了した。

文化財は保存に熱意

横浜は他の大都市のように城下町として発達した都市ではなく、開港以来百数十年の歴史の浅い街である。したがって、歴史的遺産にはあまり恵まれていないが、残された遺産は、それゆえいっそう、細心の注意をもって保存していく必要がある。その意味で港北ニュータウン建設区域の四五〇カ所にのぼる先人の残した遺跡をどう扱うかが、今後の課題である。また、周囲を宅造のため裸にされた金沢の称名寺は、境内のみならず裏山をふくめて史跡に指定し、おそまきながら文化財を景観保存の立場から保護する姿勢をしめた。さらに磯子区の宅地造成の関連で保存が問題になった三殿台遺跡は考古館として整備した。

昭和三十三年から始まっている「横浜市史」の編さんもすすんで市史四巻、資料六巻を完成した。さらに文化財保護の基礎資料として、三十九年から文化財調査報告書をすでに七集まで刊行した。

こうした文化活動にとめる一方、文化活動に尽力した功績者の表彰もおこなっている。「横浜文化賞」がそれで、市民のための教育・学術・産業・スポーツ振興など、文化発展につくした個人や団体にたいし、毎年十一月表彰をおこなっている。二十七年から四十五年までに個人七三名、十三団体が受賞している。